



# さらしな の 里



第27号

## 友の会だより

2012・秋



黒彦区の宅地造成後に再建された岩船地蔵の堂宇。ご子孫と先代の明德寺住職で昭和57年(1982)に行った再建落慶法要(高松賢一郎さん所蔵)



頭巾をかぶった岩船地蔵尊。周りには千羽鶴



高松賢一郎さんと葎ヶ鼻にお湯屋があったことを裏づける古文書。中央に「入湯」の文字



### 水魔除けの「岩船地蔵」—今も病氣平癒祈願!

若宮、芝原両区の県道沿いの境界「葎ヶ鼻」に鎮座するの  
が「岩船地蔵」です。変わった名前由来を知りたいと思ひ、  
地蔵をお守りする奉賛会会長のアンズ農家(若宮区)、高松  
賢一郎さんのお宅を訪ねました。高松さんのお話と郷土史家  
の高野義則さんが遺した文章によると、江戸時代半ばまでこ  
の辺りから千曲の流路一帯には、「黒彦千軒」と言われほどの  
立派な集落があったのですが、度重なる千曲川の洪水でな  
くなつてしまいました。それを悲しむ里人が「衆生の苦厄を  
除き再び水魔に襲われないように」との願いをこめ、3百年  
前の享保4年(1719)、この地蔵をまつたそうです。

建立時期が分かったのは、昭和45年(1970)ごろか  
ら行われた現在の黒彦区の大規模な宅地造成がきっかけでし  
た。もともとは水田だったため埋め立てに、岩船地蔵上方の  
山を崩し土砂を搬入したのですが、工事を担った長野砕石  
株式会社、信仰空間に重機を入れながらも大きな事故がな  
かったのは「お地蔵さまのおかげ」として岩船地蔵を囲つて  
いた古い堂宇を新しく建立したいと申し出がありました。解  
体したところ、地蔵の背中に、「享保4年(1719)建立」と  
あったのです。さらに堂宇の梁には「明治31年3月14日」  
再建で13人のご先祖の名前が記してあったので、「ご子孫が奉  
賛会を設立し、今でも毎年4月14日前後にお祭りをし、正月、  
お盆にも吹き流しを掲揚します。岩船地蔵は病氣平癒、子育て、  
交通安全、雨乞いなどに功德があり、千羽鶴や頭巾を寄  
せてくれる人がいて今でも大事にされています。

「岩船」といふ呼び名は、今のような立派な堤防がなく付  
近が千曲川の流路になっていた時代、葎ヶ鼻がちょうど山の  
尾根筋の突先だったので、船着き場に使われたことにちなん  
だものだそうです。堂宇の背後には崖壁のような岩が見えま  
す。今のような道(県道)がない時代は、この岩の上を上がつ  
ていたところの「すてんぼうじょう」といふ呼び名の峠道を  
越えて人々は行き来していました。登り口に斜めに伸びてい  
る木は神籬で、これに船をつなぎとめたとも伝わっています。  
付近では昔、お湯が湧き出たこともあり、その土地を所有し  
ていた高松賢一郎さんの江戸時代のご先祖は、「お湯屋」も  
やっていたそうです。

(大谷善邦)

## 姨捨駅で更級の民話

「リゾートビューふるさと号で行く姨捨夜景ツアー」—JR長野支社の企画で実施されたプチ列車の旅の乗客のみなさんに、更級の民話を披露しました。

列車は長野駅18時48分発、姨捨駅には19時33分に到着。大きな窓、ゆったりとした座席。2両編成の素敵な電車から降り立ったみなさんを、オカリナ（またはハンドベル）のやさしい音色で迎えました。滞在時間は50分ほど。夜景を觀賞し楽知会が周辺ガイドをした



後、駅舎にてみそ汁を振る舞い、いよいよ私たち語り部の会の出番となります。ふるさとの伝説「姨捨山」と創作民話「棚田の米はうんまいよ」を方言たっぷりでお届けしました。

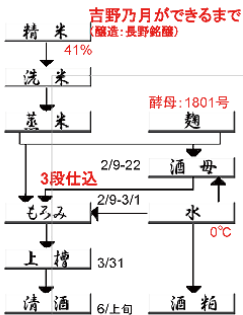
更級をPRする絶好の機会ととらえ、PTA朗読の会・水晶の会・コネットOBの高校生にも呼び掛け、BGMは口琴くちべんをお願いし、7月20日～9月30日の毎週金曜・土曜の延べ19回の長丁場を楽しみながら続けることができました。「更級」という地域の底力を改めて実感できた3カ月間でした。

（羽尾4区・野本洋子）

## 3年目に入った「吉野乃月」

今年も吉野地区では地酒造りに取り組み、3回目の酒米「美山錦」の刈り取りが終わりました。約30㌔の圃場で、籾で70袋。まずまずの収穫です。籾はこの後、安曇野で酒米用精米機に掛けられ大吟醸酒用に40%前後まで削られます。（飯米は90%、普通酒用は70%。ちなみに酒米を普通精米し食べてみましたがパサパサしておいしくありませんでした）

精米歩合を上げるにつれ、雑味のもとであるタンパク質、脂肪が減りデンプン価が増えるのだそうです。酒造りの工程を左の図と実際の写真（今年の醸造作業）で見てください。米から酒になるまでの仕組みは簡単というと、米のデンプンが麹の酵素



によりブドウ糖に変わり、これを酵母がアルコールに変えるのです。吟醸造りとは、特別に吟味して醸造することだそうです。よりよく精米した白米を低温でゆっくり発酵させ、かすの割合を高くして、特有な芳香（吟香）を有するように醸造することのこと。酵母も吟醸造り専用の優良酵母（吉野乃月は1801号）を使用しています。

吉野醸業会では3段仕込の最後の留添えの作業に参加しました。掛米と掛水を運ぶ作業です。上槽の時は、搾る前の醗酵中の原酒（どぶろく）をいただき、まさに香りの高いシャンパン、ボジョレー？のおいしさに感動いたしました。大吟醸のどぶろくは本当に貴重で格別のおいしさです。もしリクエストがありましたら、来年3月、一緒に酒蔵（長野銘醸）へいかがですか？（なお長野銘醸の「純米辛口姨捨正宗」は2012年秋の全国酒類コンクールで純米酒部門で1位）

◆「吉野乃月」仕様  
種別：純米大吟醸▽酒米：吉野棚田産美山錦▽仕込水：聖水系（弁天清水▽頭無し）▽精米歩合：41%▽アルコール度：18%▽醸造アルコール：使用なし▽来春は、更に精米歩合を下げ究極の30%台を目指す？  
準会員募集中です。（優先予約酒蔵見学など）  
（羽尾5区・森政教）

（羽尾5区・森政教）

# 三島区復興のリーダー坂田寅治郎さん



須坂・三島地区の明治大復興は坂田寅治郎の大事業だった。寅治郎（1860～1928）の幼少期は須坂・三島の耕地が千曲川の氾濫で幾度となく荒地になってしまい、毎年復興に復興を続けていた時代に育った。寅治郎は明治28年より3年間更級村の村長を務めるかたわら農業改善を指導している。土地を改良して米の増産を図ろうと、日々米作改良

## 更級小の二宮尊徳像にも縁が

千曲川に近い集落の須坂・三島地区は古来、大雨による洪水に苦勞しましたが、明治時代、同区在住の坂田寅治郎さん（上段左の写真）のリーダーシップで暮らしが改善されました。更級小学校にある二宮金治郎（尊徳）像（上段右の写真）も寅治郎さんと縁があるようです。三島区の郷土史家、大橋静雄さんに寄稿してもらいました。（編集部）



に没頭した。特に明治43年は8月10日から15日と降雨は続き、明治最大の豪雨となり川西地区に甚大な災害をもたらした。須坂下中島堤防300間（546m）を決壊し、浸水耕地は10町歩、その跡地は三島の池として残つ

た（中段の写真は、1993年に撮影、現在は埋め立てられて存在しない）。この洪水は慶長7（1602）年、現在の黒彦区付近にあった集落の黒彦郷が流れて以来のことだった。荒廃した田畑をいかにして復興するか坂田寅治郎は羽尾・上三島の医師西沢市郎と須坂・下三島の養蚕篤農家、知野周助（明治11年9月8日、明治天皇御巡幸のとき天覧に供した特産物の中に父周作の春蚕繭があった）の有力者と発起人となって、『談話会』という組織を結成し、下三島に研修用に集会所を作り復興計画に当たった。その内容は次のようなものだった。

一、各戸より年2回30銭ずつ積み立て、その利息で救済金にあてた。

一、生活費を節約するため、婚儀・葬儀は談話会にて行事指導する。謡・高砂松飾り・彼岸供養 正月・盆における料理に至るまで講習し実施した。

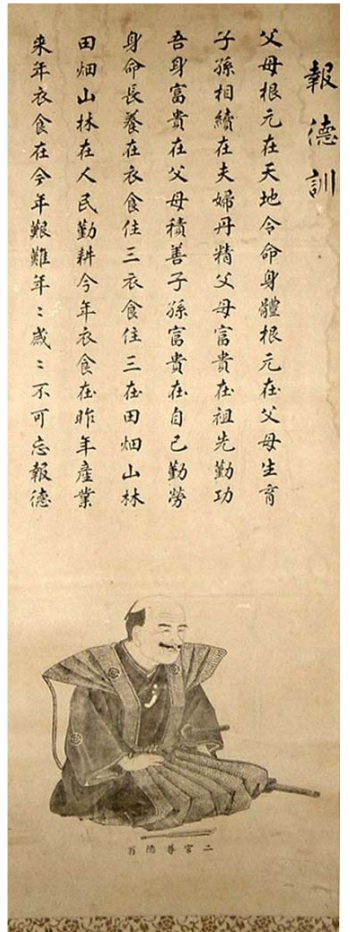
一、若者衆の行事活動は談話会にて行った。

ほかに農業講習と実習も行われたが、これらは江戸時代後期に農村復興政策を主導した二宮尊徳の「報徳

思想」を基にしたもので、報徳社を結成し右の掛け軸に書かれた報徳訓を読み上げ、復興計画を実施した。尊徳の教え、神道、仏教、儒教をあわせてのが報徳訓で、農民が豊かに生活できる新しい農村に建て直す知恵が盛り込まれた言葉だ。小学校以上の若者は夕食をすましてから集会所に集まり、報徳訓を読み報徳思想を学びながら農業に励んだ。

寅治郎は若者衆に、この精神に基づき「坂田式農業経営法」を徹底的にたたき込み三島耕地5町歩の復興に向かった。これは更級村全体の復興とは比べにならないほどのスピードであった。現在でも三島耕地は整然とした区画が見られる。

太平洋戦争終了後、全国の小学校に置かれた二宮金治郎の像は「軍国主義」に利用されたとして、撤去が進んだが、更級村の子供たちは明治時代より「報徳訓」を学び、農業に励んできた。特に水害復興に心の支えとなった当時の人々は、更級小の金治郎の像を撤去することを許さなかったと古老が話していたのを私は覚えている。



報徳訓

父母根元在天地令命身體根元在父母生育子孫相續在夫婦母持父母富貴在祖先勤功吾身富貴在父母積善子孫富貴在自己勤勞身命長養在衣食住三衣食住三在田畑山林田畑山林在人民勤耕今年衣食在昨年産業未年衣食在今年艱難年・歳・不可忘報徳



# 島谷一門がお祭りを営む中院林城跡

## おらほの冠着

26



「中院林城」(下の写真の矢印)は、冠着山麓にある仙石区の上方の中院林山にあります。15年くらい前のある日、島谷勇氏から「あそこは島谷の同姓で毎年草刈りをしていて終わった後、祠の前でお祭りをし、小さいころはベースボールをした」と聞きました。後日、家族と登ってみました。後になつて羽尾の花柄池から登る道がメインルートと分かったのですが、このときは仙石の「山の神(赤松の巨木)」の下を右に折れ、湯沢川を渡り、道なき道を登りました。砂防堤らしき上を歩きなが



ら、20分くらいかかって頂上に着くと平地があり、祠がありました。一面草でしたが、平坦地で主郭がありました。戸倉町誌によると、南北25m

東西18mで、副郭の跡は主郭より少し高い位置に10m×34mの広場状に残っています。

眺望が大変良い場所です。展望すると、佐野城、塩崎城、稲荷山城、屋代城、正城、大峰城などが見渡せます。一本松峠の道沿いも見え、北信地域の全体の様子がよく分かります。戦国時代、山城間の連絡のろしが情報伝達の手段として用いられました。戸倉町誌などの記述を総合すると、中院林城は見張りを兼ねた、のろし台として使われたものではないでしょうか。中院林という名前は、冠着山頂を冠着信仰の奥社と考えると、平坦地の遙拝所は里宮となるので、この両者の中間点をなす山の中に中院(中社)を設けたとも考えられるそうです。「中院林城」という呼び名は、こうした冠着信仰の中院が設けられたこと、のちにここに城郭が築かれたことになむものかもしれないということです。

島谷一門の老家、島谷重政氏のお話によると、同姓は現在15件。重政氏宅前には鳥居(中段左の写真)があり、出雲大社(島根県)の主神である大国主大神を祭っています。島谷同姓では中院林城の広場を、以前は春秋のいずれかに山の手入れを行っていました。現在は年1回、春に行い、手入れは2、3年に1回行っています。お酒を持ち、手入れの後、氏神様の祠の前で祭典を行うそうです。(仙石区・関清春)

### 資料館だより



本年8月より新スタッフとしてお世話になっております杉本栄子(左)、倉科在住)と竹田美枝子(右内川在住)です。どうぞ、よろしくお願いたします。

〔編集後記〕「へえー、そうなんだ」が今号もたくさんありました。葎ヶ鼻の岩船地の秘密、三島の整然とした田畑の由来、冠着山の前山のろしを上げる場でもあったこと…▽編集子の80代の父は、10代のころの日照りとき、岩船地蔵が農業用水の中にいるのを見たと言います。横倒しになり全身が水に浸っていたそうで、記事中の「雨乞いの功德」は、このエピソードからも裏づけられます▽「吉野乃月」は大変人気があり、生産者も確保に苦労するほどだとか。ラベルのデザインも遊び心があり、何か語り出したくなります▽姨捨駅での語り部の会のみなさんの活動はボランティア。頭が下がります▽前号で紹介した冠着山の坊城平に復活させた「冠着十三仏」の歌も完成。音楽グループ「さらしな棚田バンド」が近く、披露してくれるはずですよ▽10月は当地を舞台にしたNHKのドラママロケのほか、若大将の加山雄三さんが旅番組取材でさらしなに来訪。次号も話題が盛りだくさんです。

### 編集・発行

さらしなの里友の会たより編集委員会

事務局・さらしなの里歴史資料館

〒三八九・〇八二二

長野県千曲市大字羽尾二四七の一

電話 〇二六(二七六)七五一

Fax 〇二六(二六二)四一六一